

「知のオントロジー」—現代思想の構図— : (3/9)

by 佐伯 守 (2000.12.25、萌書房):

Ⅱ. 科学性の構図

(transformed by Takaya Endo)

- 2.1 現実＝現実性をめぐる議論から始めます
- 2.2 〈非現実性〉という言い方は
- 2.3 科学的現実の世界では
- 2.4 現実の〈法則性〉とは

2.1 現実＝現実性をめぐる議論から始めます

さて、現実＝現実性をめぐる議論から始めます。恒常性[コンスタンツ]は、色彩恒常性であれ形態恒常性であれ、いずれも物の客観性(=対象性)ということに不可欠です。それらは、知覚-生理装置という〈鏡の背面〉に反射してできた〈現実〉です。〈鏡の背面〉とは、外からの刺激を濾過する〈生得的解発[アオスレーゼ]メカニズム〉とよばれる生理学的な装置のことです。それは、刺激を人間にとって意味のあるかたちに造りかえる装置です。K・ローレンツはこう言います。

(1)

「色彩、大きさ、方向そして形式の恒常性のようなすべての恒常性のはたらきは、それらが刺激データの偶然的な形式や種類を知識獲得の過程から排除する限り抽象作用的であり、対象につねに付着している諸特性を、たまたま支配している知覚条件とは無関係にいつも同じやり方で報知する限り、それらはまた客観化作用的である。本質的なものを偶然的なものから分離する能力は、感覚過程と神経過程とに依存しているが、これらはわれわれの自己観察や合理的検査には近づきたいものであるけれども、機能的には悟性的計算や推論とすべての点で同じものである。このような無意識の計算過程を、われわれはエゴン・ブルンスヴィクの術語をかりて合理形態的(ratiomorph)なものと呼ぶ。」(谷口茂訳『鏡の背面』第七章)

同じことを、ローレンツは次のようにも言います。

(2)

「そもそもわれわれの知覚自体、理性がわれわれに樹や家や人間を見るように仕向けるときに、理性に気づかれずに、抽象作用を行なっている。偶然的要素を度外視し、報知の対象を、知覚される事物に常に付随する特性——たとえば色、大きさ、形——に限定することは、いわゆる恒常知覚の本質的な機能である。」(谷口茂訳『自然界と人間の運命』1、第三章)

(3)

「現実には連続しているものを、理解しやすい形に体系化するために人為的に分割するのは、したがって、主体外的現実を認知的に把握するための前提となる能力であり、その一部はすでにわれわれの知覚の擬合理的な能力によって実行されている。これは……理性能力と同様の真の認識力なのである。」(同上)

さまざまな事物を、その類似性や相似性に着目して組織だて秩序だてて知覚し、認識するという分類作業のうちすでに抽象化や想像力のはたらきが生きています。〈現実〉の現実性は、さらに多様に組織化されたものです。E・モランはこう言います。

(4)

「現実が認識されるためには、どうしても記号／象徴や表象や言説が観念のかたち
に現実自身を非現実化しなければならない……。認識は、まさにその非現実性
のおかげで現実接近しているのであるが、しかしこの非現実性は、組織されな
ければならない。また、まさにこの「現実的な」組織のなかで、それを通じて、
認識は、現実との照応関係にはいるのである。」(大津真作訳『方法3・認識の認識』「第一部の
まとめ」I)

この〈非現実化〉された現実とは、知覚・活動世界のなかで、人間の〈自由〉が外界と共同して
創出した現実です。この現実には、コスモス物理とマイクロ物理との〈中間帯〉に位置し、まさに〈人間
の現実〉となっているものです。モランは言います。

(5)

「もちろん、マイクロ物理現象(粒子の運動と邂逅[*かいこう:偶然に会う])とコスモス物
理現象(銀河の形成と衝突、星の爆発、ブラックホール)があるけれども、われわれ
の中間帯に固有の現象である形態や組織や事物や存在物は、マイクロ物理スケール
では自己解体され、コスモス物理スケールでは消滅する。」(同上)

この〈中間帯〉は、マイクロにもコスモスにも還元しえない独自の領域です。そして、さらにモラン
は言います。

(6)

「不変性、恒常性、規則性がなく、偶然と無限の多様性でしかない〈世界〉を認識す
ることなど、われわれにはできないのである。したがって、時空のなかに位置づけら
れ、一様性、複数性、同質性、多様性、可変性、変更、恒常性、非恒常性からでき
たカクテルを含む現象世界しかわれわれにはできないのである。」(同上)

2.2 〈非現実性〉という言い方は

ところで、〈非現実性〉という言い方は、なにか〈現実それ自体〉の存在を想定したうえで、それ
とのちがいを表現するという意味あいをもつ表現法です。これを〈カント主義〉と言ってよいでしょ
う。科学的現実と日常的＝生活的現実とのちがいを強調する発想のことです。試みに、ここで科
学的〈現実〉に注視してみましょう。物質の物質性は〈作用性〉に還元されます。たとえば、R・G・
コリングウッドは、物質についての古い観念から説きおこして、次のように言います。

(1)

「その古い観念は、何よりもまず、物質の所与の一片はそれがそれであるものであり、次に、それはかかる永遠不変の本性を共有するゆえに様々な機会に様々な仕
方で振舞う、ということであった。物体が衝撃においてか他を牽引[けんいん]すること
においてか力を発揮するのは、物体が、それ自体であるいは本来一定の質量を
所有するためである。しかし今や、有形の物体に属しているエネルギーが、それら
相互の作用を説明するばかりか、各物体の延長性や質量をそれだけで説明する。
なぜなら、一立方インチの鉄は、鉄を組織している原子の引力と斥力の平衡のゆえ
に一立方インチを占有するにすぎないからであり、そしてその原子はさらにそれを
組織する電子の引力と斥力によって据えられる律動的パターンゆえに鉄の原子

にすぎないからである。したがって化学的性質ばかりか物質的・量的諸特性さえも、いまや活動の機能として把握される。物質が、まず何よりもそれが為すことから独立に、それがそれであるがゆえにそれが為すことを為す、ということが真理であるどころか、いまや、物質は、それが為すことを為すがゆえにそれはそれであること、一層正確に言えば、それがそれであるのは、それが為すことを為すというのと同じであるということ、を教えられる。[中略]物質は、もはや存在が行為とは独立であり論理的に物質に優先する領域としての、精神や生命と対比されない。それは、存在が根底においてそのまま行為であるような第三の領域として精神や生命に類似している。」(平林康之他訳『自然の観念』Ⅱ現代物理学)

〈在る〉と〈為す〉と〈成る〉との一体性、そこに物質性は存在し、そこはまた、〈関係〉によって成立しているわけです。してみれば、〈存在〉それ自体なるものの存立性も虚妄ということになります。〈在る〉とはつねに、〈関係-内-存在〉としてのみ、〈なにか〉で在ることです。

ここには、色も形も大きさも登場しません。中間帯の現象にふさわしいそれらを取りもどしてみましよう。そうした恒常的なものも、しかし、科学的現実のもとでは〈解体〉します。廣松渉はこう言います。

(2)

「人々が、色・形・大きさ……といった諸性質の複合的統一体における実体的な“核”という表象を抱く機縁は、多くの事物において“境界的に閉じた形状”が認められ、この形状は容易に崩れず、この閉じた境域内には外物が侵入しえないこと(不可人性)、動かそうとすれば抵抗があり(慣性・質量・重量)、触れれば固いこと(固性[ハードネス])、事物のこういう在り方はその事物において覚知される諸多の性質が変様しても概して安定的・持続的に恒同的であること、このことの体験に根差すものと思われる。人々が色・香・味……などの第二性質や有用性にかかわる用在的性質、さらにはまた、概念的反省によって規定されるたぐいの性質、これらの性質と上述の“不可人性”“質量性”“固性”といった性質とを区別し、後者を以て事物に内在的・本有的な性質だとみなすのは諒解に難くない。しかしながら、これらの内在的で本有的とされる諸性質でさえ、他物との作用的関係において甫[はじめ]て“発現”するのであり、自足的な性質ではない。(なるほど、不可人性・慣性・固性のごときは、もし然々の作用関係におけば必ず発現する“可能的性質”“潜在的能力”として内自化されている。だが、対他的関係規定であることには変わらない。)「性質」であるかぎり、“内在的性質”であれ“実体的性質”であれ、凡[およ]そ一切の性質が対他的関係の“内自化”されたものである。こうして、「性質」を関係規定の“結節”として把握し返したからといって、さてしかし“不可人性”“慣性”“固性”といった仮現的覚識相が消失するわけではなく、事物が不安定化して宙に浮くというようなことは生じない。[中略]実在するのは、“性質の複合体”(正しくは関係態の重疊的結節)だけであり、それで足りる。“担う部分”と“担われる部分”とに事物を分節化して考えるのは、日常的な思念における諒解しうべき傾動ではあるが、事柄に即して原理的にみるかぎり、一種の“方便”にすぎない。しかるに人々は、ここでの構図を固持して、在りもしない「実体そのもの」を要請的に想定する。」(『存在と意味』第三篇第二章「事の物象化と実体主義的錯認の位相」第二節)

これが言わんとすることは、こうです。――いっさいの物理的〈性質〉が〈対他的関係規定性の結節〉つまり、他の諸物との関係の結果である以上、〈関係〉からはずれた恒常不変の自己同一的な性質をもつ物は存在しないこと、〈在る〉ことと〈現われる〉こととの一致として、物質は絶対的にその〈内〉なるものも、その絶対的に〈外〉なるものも有しないこと、物質性とは関係性にほかならず、物の性質は〈関係態〉そのものであるということ、これです。

2.3 科学的現実の世界では

科学的現実の世界では、この目でみ、この手でさわることのできるような〈事物〉も、またその

事物の感性的な〈対象性〉も存在しません。対象性とは、論理的に構成(=要請的構成)されたものにほかなりません。やや難しい表現ですが、カッシーラーはこう言っています。

(1)

「ある内容を認識するということは、それを単なる所与の段階から取り上げ、それに、ある論理的な一定性と必然性を与えらるることによって、〈対象[オブジェクト]〉に改鑄することである。したがってわれわれは「対象[ゲゲンシュタント]」を――それがはじめからそれだけで〈対象として規定され〉与えられているかのように――認識するのではなく、われわれが経験内容の一般的な流れのなかに一定の境界を作り出し、ある持続的な要素と統合連関とを固定することによって〈对象的に[ゲゲンシュタントリツヒ]〉認識するのである。この意味では、対象という概念は、もはや知識の窮極の〈制約〉ではなく、逆に、知識の確実な所有物[アイгентウム]となっているもののすべてを表現し確定するための基本的手段にほかならないのである。それは、知識の論理的資産そのものをあらわしているのであって、現在もそして今後も永久に知識には拒まれている不可視の彼岸なのではない。それゆえ「事物」とは、単なる物質[シュトッフ]としてわれわれの前にある未知の事実[ザツヘ]ではもはやなく、理解すること[ベグライフェン]の形式と様態そのものの表現なのである。形而上学が自存的な事物それ自身(Ding an und für sich)に〈性質〉として付与するものすべては、いまでは客観化の過程における必然的な契機であることがわかる。形而上学では、感性的知覚の可変性や不連続性とは区別された対象の常在不変性と連続的持続性とは語られるが、これに反してここでは、普遍的な方向線として、発展的・法則的統合に役立つ〈要請〉としての同一性および連続性が登場する。それは、認識される事実的徴標であるよりは、むしろ、それをもって認識する論理的道具である。」(山本義隆訳『実体概念と関数概念』第六章)

事物性とは〈論理的欲求〉による〈虚構〉の産物であるという性格をもっています。同一性や連続性の概念が、論理的道具として〈要請〉されるのは、対象や事物の論理的構成に、それが必要不可欠だからです。〈要請〉とは、〈必要不可欠〉を〈必然性〉とは称しえない、論理学の苦心の所産にほかなりません。

さらに言いますと、精密科学における〈実体的〉なものは、諸現象間にある〈定量的関連〉のことです。E・カッシーラーは言います。

(2)

「われわれはつねに、単に存在要素間に考えられる関連のみしか捉えることができず、そのさい、この要素自身はやはりつねに不可視の自存的な核と考えられているということではなく、われわれが事物の〈範疇[カテゴリー]〉に達しうるのは、もっぱら関連の〈範疇〉を通してのみであるということである。」(同、第六章)

(3)

「数と量・恒存と変化・因果性と相互作用などの枠外には、なんら客観性もないのだ。これらの諸規定のみが、経験そのものの究極的に不変のものであり、したがって、経験において・また経験によって確立されうるすべての現実の不変のものである。」(同、第七章)

精密科学の法則性も〈最高の権威をもつ蓋然性〉の域を出ることはできない、とE・フッサールはみ、さらにこう言います。

(4)

「事実に関する精密科学の法則はすべて確かに真の法則ではあるが、しかし認識

論的に考察すれば——事物に根拠をもつ虚構(Fiktionen *cum fundamento in re*)ではあるが——理想化的[イデアリジレント]な虚構であるに過ぎない。それら諸法則は、理論的諸科学を現実にも最も適合した理想として可能にするという課題を、したがってあらゆる科学的事実研究の最高の理論的目標たる説明的理論の理想、法則性による統一の理想を、人間的認識の乗り越えられぬ限界に応じて可能な限り実現するという課題を、充たしているのである。」(立松弘孝訳『論理学研究(I)』第四章)

2.4 現実の〈法則性〉とは

現実の〈法則性〉とは、法則の現実性以上をも、またそれ以外をも意味しない、ということですから(カッシーラー)。ここに、〈不確定性〉がみえています。物の絶対的事物性に即した絶対的法則性といったものはないということです。渡辺格はこう言います。

(1)

「古典力学的な“純客観的”な世界はわれわれの前にはなく、実験操作も含めて人間の認識限界と関係している不確定性の範囲でしか、世界は認識できないのである。〔中略〕こうして、量子力学の展開とともに、認識主体としての人間の存在と限界という問題が、自然科学の背後にしのびよってきた。」(『人間の終焉』第二章)

認識の限界と制約の自覚という点では、カントの思想はいまも示唆的です。人は単に〈現象〉の認識にいたりるだけであって〈物自体〉の認識にはいたりえない、とカントは認識の限界を簡潔に示していました。また、現象は〈経験のうちで〉使用されるかぎりでは〈真理〉を生むが、経験の限界をこえて〈超越的となる〉と、まったくの〈仮象[シャイン]〉以外の何ものをも生じさせない、といったのもカントでした(土岐邦夫他訳『プロレゴメナ』§ 13)。カントは言います。

(2)

「自然(Natur)は、普遍的法則にしたがって規定されているかぎりでの事物の存在(Dasein)である。もし自然が物自体の存在であるというのなら、われわれは自然をけって、ア・プリオリにもア・ポステオリにも、認識できないであろう。〔中略〕経験はたしかに、何があるか、それがいかにあるかを私に教えるが、しかしけってそれが必然的にそうであって、それ以外であってはならない、ということを教えない。それゆえ、経験は物自体の本性(Natur)をけって教えることはできない。(同、§ 14)

さまざまな概念・記号・表象・象徴の結合体系のなかで、またそれを用いて、物の事態性を描くことが、科学の仕事をなす、と言えますが、これは、もともと言語・言葉を用いて〈現実＝実質〉を肥えようとする日常生活世界での人間の営みの延長線上に生じていることといえます。これについては、たとえば丸山圭三郎は次のように言います。

(3)

「ラング[言語記号]は両面に関して二つの実質[シュブスタンス]の世界(連続体)を切り取って不連続化する。それは音の実質と、事物・出来事・過程、そして人間がそれらを通してもつ一切の生体験の実質であり、いずれも人間が言語を習得する以前からおかれた状況であり、現実である。ラングはその形相[フォルム]を通して、一方では物理音を対立関係におき、他方では言語外現実を概念化する。この対立音のイメージと概念が一体化したものが、言語の価値を生み出すのである。ラングはまた、海辺の砂地の上に広げられた網にも譬えることができよう。その網目が密であれば、砂地には細かく区切られた影が落ちるだろうし、疎であれば、まばらに区切られた影が映るであろう。そして網を取り去ってしまえば、砂地は元のままの一面の連続体に戻ってしまう。形相の網次第で、実質たる砂地にはさまざまな模様が描かれるのである。」(『ソシュールの思想』Ⅲ、第二章)

実質たる砂地の連続体、これが自然科学では大自然ということになります。科学の仕事はこの大自然を、法則性の網目で捉えて、それを、いわば〈小自然〉化することです。ただし、丸山の言うつぎの点には留意すべきです。

(4)

「ソシユールにとっての言語記号とは、思考の無定形な塊から恣意的に切り取られた概念と、音の連続体から同じように恣意的に切り取られた物質音の結合が言語主体の心の中に残すイメージとしての刻印であるのだから、我々の現実もしくは事物のカテゴリー化〔概念化〕は、ラング〔言語記号〕の事象であり、我々が外界を見るのは言語を通してであり、その連続体に区切りを入れるのは、我々の言語の意味体系なのであって、その布置構造が言語次第でさまざまに異なるのは当然であろう。」(同、I、第三章)

言語化＝記号化された〈現実性〉は、必然性を欠くという意味で〈恣意〔しい〕的〉である、ということです。理論(theory)と劇場(theater)とは、ギリシャ語(thea 英語のsight)を語源としています(佐藤文隆『量子力学のイデオロギー』。言語の意味体系の内側で、みえるように説明するのが理論の役割ということになります。

よく言われるように・説明要素(原因、法則、秩序、理由)は説明できません。なぜ、原因ということが、また理由ということが、必然的になければならないのか、という問題です。そうした不明の領域の前での〈客観性〉が、客観性ということの現実性です。再度、カントのことに注目しておきます。

(5)

「経験はたしかに、何があるか、それがいかにあるかを私に教えるが、しかしけっしてそれが必然的そうであって、それ以外であってはならない、ということをお教えない。それゆえ、経験は物自体の本性をけっして教えることはできない。(前掲『プロレゴメナ』§ 14。)

探究にともなう制限・制約は、むろん社会科学にもつきものです。次のM・ウエーバのことが、問題の所在をよく示しています。

(6)

「いかなる概念体系も、われわれの知識やそのときどきにわれわれが利用できる概念用具のその都度の状況を踏まえて、われわれが自分の関心の範囲内にその都度ひき入れた事実のカオスに、秩序をあたえようとする試み以上のものではない。過去の人びとが、直接にあたえられている現実を思想によって加工し――ほんとうはそれは思想によって変形することを意味するのだが――かれらの認識の状態や関心の方向に応じた概念のなかに整序することによって発展させてきた思考装置にたいして、われわれは新しい認識にもとづいて、現実から獲得することのできるもの、獲得しようと欲するものを、つねに対決させなければならない。」(徳永恂訳、論文「社会科学および社会政策的認識の「客観性」」)

さらにもう一文引いておきます。認識の妥当性と価値理念との関係についての、ウエーバーらしい文章です。こうです。

(7)

「あたえられた現実をカテゴリーによって整序するばあいに、そのカテゴリーは特殊な意味で主観的である、言いかえれば、われわれの認識の前提をしめすものであ

る。さらにそのカテゴリーは、経験的知識だけがわれわれにあたえることができる真理が価値をもつ、という前提ときりはなすことはできない〔中略〕。科学だけが果たすことのできるもの、つまりそれ自身経験的〔エムピリツシュ〕現実でもその模写でもなく、妥当な仕方では経験的現実を思考によって秩序だてるさまざまな概念や判断に代えて、そういうかたちでの科学とは別の真理をもとめようとしても、それはしよせん空しい〔中略〕。経験的にあたえられているものは、たしかにただ一つそれに認識価値を付与する価値理念によって規整され、理念からその意味を理解されるものではあるが、それにもかかわらず経験的な所在にもとづいて認識の妥当性(Geltung)を証明することは、経験的に不可能である。〕(同上、傍点引用者)